

124 ART PAPER

2023 WINTER

NAGOYA CITY ART MUSEUM NEWS



福田美蘭〈うぶごえ(コンスタンティン・ブランクーシによる)〉2023年 アクリル・パネル 作家蔵



コンスタンティン・ブランクーシ〈うぶごえ〉1917年(1984年鑄造) ブロンズ 名古屋市美術館蔵

特集 福田美蘭×名古屋市美術館 コラボレーションから生まれたもの

TALK BACK 「水野清亭〈清水陽春〉」

新収蔵資料紹介「キャンペーン写真集『この地上にわれわれの国はない』全日本学生写真連盟公害キャンペーン実行委員会
展覧会現在進行形「開館35周年記念 ガウディとサグラダ・ファミリア展」

EVENT ワークショップ「絵のお医者さんの仕事」

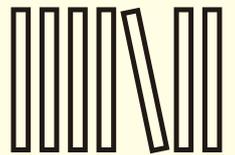
REVIEW 「小杉滋樹展」「トランスボーダー 和歌山とアメリカをめぐる移民と美術」

COLUMN 「わかりやすさ」の多様性

名古屋市美術館ニュース アートペーパー

発行 名古屋市美術館
名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜・白川公園内)
TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005
<https://art-museum.city.nagoya.jp/>
休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始
開館時間 午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

執筆 井口智子(I.)、勝田琴絵(KK)、久保田舞美(mm)、
近藤将人(コ)、清家三智(3)、竹葉丈(J.T.)、
保崎裕徳(nori)、森本陽香(haru)
デザイン 岡田和奈佳
印刷 鬼頭印刷株式会社
発行日 2023年12月1日



Nagoya City Art Museum

特集 福田美蘭 × 名古屋市美術館 コラボレーションから生まれたもの

はじめに

特別展「開館35周年記念 福田美蘭——美術って、なに?」は、東海地方では初めてとなる福田美蘭の個展として、名古屋市美術館で開催しました(令和5年9月23日[土・祝]—11月19日[日])。福田美蘭と名古屋市美術館には、30年来のつながりがあります。はじめは1992年の「森村泰昌・福田美蘭によるスペイン静物画へのオマージュ」であり、そこで《陶器(スルバランによる)》と題した2点の作品(1点はカラー写真、もう1点はレンチキュラーレンズによる作品)を購入したことから、収集作家となりました。この後も、「だまし絵展」(2009年)や「モネ それからの100年」(2018年)などで作品をご出品いただき、当館ではなじみ深い現代作家のひとりとなりました。

名古屋で個展を開催するにあたり、名古屋市美術館ならではの新作を発表することを福田さんからご提案いただきました。福田さんは、当館の所蔵作品の中から市民に広く親しまれている作品数点を選び、それらにちなんだ新作を5件制作しました。本特集では、名古屋市美術館のコレクションと福田さんがコラボレーションした新作について、詳しく紹介します。

プーチン大統領の肖像

| fig.1-2

当館の所蔵作品の中でもっとも知られた名品といえば、やはりアメデオ・モディリアーニの《おさげ髪の少女》(1918年頃)でしょう。福田さんはモディリアーニの人物像を研究し、その手法を取り入れて、プーチン大統領の姿を描きました。アクリルによる4点組の絵画《プーチン大統領の肖像》(fig.1)は、顔の造作を単純化し、要素をそぎ落としていくことで、モディリアーニ風に仕上がっています。この作品については展覧会図録の巻頭テキストに詳しく書いたのでそちらを参照いただくと、ここでは14点組の素描からなる《プーチン大統領の肖像(カリアティード)》(fig.2※画像は14点組のうちの一部のみ掲載)についてお話ししましょう。

カリアティードとは、ギリシャ神殿に見られる女性の姿をかたどった柱の装飾です。モディリアーニは、彫刻家コンスタンティン・ブランクーシから石彫の技術を学び、カリアティードの素描を繰り返し描きました。福田さんはモディリアーニのそうした探究について、「古代世界の彫刻的力強さへの関心が、肉体のヴォリュームの暗示」に向けられていると解釈し、プーチン大統領の姿と重ね合わせて作品化しました。福田さんの作品では、少しずつポーズの異なる大統領の姿が14枚並びます。いずれも上半身裸で釣りや水泳に興じる様子で、14枚それぞれの姿に大きな差異は見られません。福田さんは、「プーチン大統領は、国民の支持率が落ちてきた時、上半身裸で乗馬や魚釣りをしている様子を国営メディアに流すことが多く、頼りになるマッチョな男であるというイメージによって人気を回復してきた」

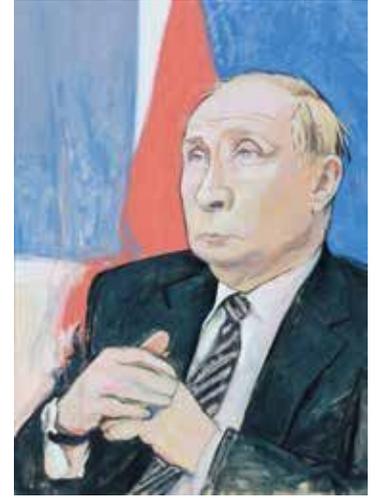


fig.1 《プーチン大統領の肖像》2023年
アクリル・パネル(4点組) 作家蔵

として、大統領がイメージ戦略のために見せる姿を素描に表しました。この作品では、類似した素描が連続して存在することが重要な要素になります。SNSや映像メディアが多大な力をもつようになった昨今、人々が、同じような画像や映像を繰り返し流通させながら自己のイメージを形成し定着させるという極めて現代的な様相が重ね合わされているかのようです。モディリアーニによるカリアティードも、類似した素描が膨大に存在しており、イメージが量塊となったときの力強さを感じさせます。古典と現代との間に共通項を見出しながら、自分なりの視点で整理し、福田さんならではの作品に仕上がっています。

説教(フランク・ステラによる)

| fig.3

《説教》は常設展示でおなじみの作品ですが、福田さんの新作では、《説教》の造形が大胆にも、チョコレート・ドリップケーキの上の飾りになっています。福田さんは、フランク・ステラの長い画業について丁寧に調べ、生涯にわたって抽象絵画の可能性を追求し続ける姿勢を深く理解しました。そして、工場規模で金属加工を行うといったステラの制作手法を、アメリカ的な大量生産・大量消費社会と重ね合わせ、こうした造形が生まれました。ステラ本人に会い、一緒に記念撮影をした経験がある福田さんにとって、ステラは、現代美



fig.2《プーチン大統領の肖像(カリアティード)》(14点組のうち一部) 2023年 鉛筆・紙 作家蔵



fig.3《説教(フランク・ステラによる)》2023年 アクリル・パネル 作家蔵

うに思えます。福田さんは、カー口の生涯と画業に思いをはせながら、作品世界の外側に福田さん自身の解釈をそっと付け足すようにして、新作を仕上げました。先に紹介した2点や、あとで述べる《うぶごえ(コンスタンティン・ブランクーシによる)》では、元になったオリジナルの作品は福田さんの解釈を通して、まったく別の形で生まれ変わっています。しかし、この作品では、オリジナルの作品がもつ静けさや親密さは損なわれることなく守られ、さらにその外側にジョウロと人工芝からなるもうひとつの世界が繋がったことで、オリジナルの作品がもつ作品世界が広がりを得ました。これまでも数々の名画にインスピレーションを得て作品化してきた福田さんですが、この作品では、新しい表現の方向性が示されたと感じます。

うぶごえ(コンスタンティン・ブランクーシによる)

| 表紙の作品[上]

最後に紹介するのは、モノクロームでまとめられたシンプルな作品です。元となったのは、彫刻家コンスタンティン・ブランクーシによるブロンズ彫刻(表紙の作品[下])です。タイトルに「うぶごえ」とあるように、卵型の造形は鳴き声をあげる新生児の頭部を表現しています。造形は極めて単純化されていますが、まぶたが開ききっていない生まれたばかりの赤ん坊の顔を想像させます。丸みを帯びたフォルムは、腕の中でそっと抱きかかえたいくなる愛おしさを感じさせます。研磨されたブロンズの表面は金色に輝き、周囲の景色が映り込みます。そうした点もこの作品の魅力のひとつですが、別の観点からすると、つややかな表面に目が行きがちで、純粋に造形そのものに着眼することが難しくなっているともいえます。福田さんは、《うぶごえ》からブロンズの物質性と色彩を取り除くことで、彫刻の造形だけを抽出して描いてみせました。オリジナルの《うぶごえ》は何度も見ているはずなのに、福田さんの作品を見ると、表面のくぼみに複雑なニュアンスをもった細かい凹凸が多数刻まれていたことを、再発見させられます。ブランクーシが追求した造形の抽象化・単純化を、彫刻ではなく絵画だからこそ可能な方法で表現させているのです。

おわりに

福田美蘭さんと名古屋市美術館コレクションのコラボレーションは、いかがでしたでしょうか。取り上げたのはいずれも常設展示でなじみ深い作品でしたが、「知っているつもり」で実はよく見ていなかったことに気づかされ、新しい魅力の発見につながったように思います。現代作家の眼を通してコレクションを楽しむ機会ともなった本展。今後も、こうした試みが生まれることを期待したいです。(haru)

術の巨匠という遠い存在でありながら、かつ知人として近く感じられる存在でもありました。そこで福田さんは、完成した新作について報告の手紙をステラに送り、感想を求めることにしました。残念ながら、ステラからの返答はまだありませんが、手紙を送るという行為は、この作品にとって重要な要素でした。というのも、福田さんにとって、「美術を身近なものにする」ということが大切な制作テーマのひとつだからです。福田さんは、名画や時事問題など様々なテーマを取り上げて制作してきましたが、制作の根底にあるのは、「美術を遠い存在にせず、誰もが楽しめるものにする」という姿勢でした。ステラに手紙を送ることは、ステラと現実的なつながりをつくることであり、ステラは決して遠い存在ではなく、私たちと同じようにこの時代を生きているひとりの現代アーティストなのだと示しています。美術館で絵画と向き合うとき、実物は目の前にあるのに、絵画と自分自身との間に遠い距離を感じる場合があります。とくに名作と呼ばれる作品であればあるほど、自分とのつながりを感じ取ることは難しいものです。名画をただありがたいものとして受動的に鑑賞するのではなく、自分自身に関わるものごととして捉え、主体的に鑑賞するヒントを、福田さんは作品を通して伝えようとしているのではないのでしょうか。

死の仮面を被った少女(フリーダ・カーロによる)

| fig.4

福田さんには珍しい、空間表現としてのインスタレーションの形式をとった新作です。壁面に掛けられているのは、フリーダ・カーロの《死の仮面を被った少女》(1938年)の複製パネルです。その下から赤く光るノンネオン管が床に延び、人工芝の上のブリキのジョウロへとつながっています。ジョウロの中には、カーロの顔が描かれています。福田さんは、カーロの人生と作品が深く関連し合って成立していることを思い、カーロにとって「矛盾や不運に耐えて、外部の現実として提示することを可能にしたのが、彼女にとっての絵画」だったのではないかと推察しました。名古屋市美術館が所蔵するカーロの作品は、骸骨の仮面を被った少女とジャガーの仮面、背景には雄大な山脈と青空を組み合わせ、静謐な雰囲気漂う小品です。カーロには痛ましい流血の女性像や力強い瞳の自画像など、見る者に強いインパクトを残す作品が多いことを思うと、《死の仮面を被った少女》には、そうした作品とは対極の静けさが漂っているよ

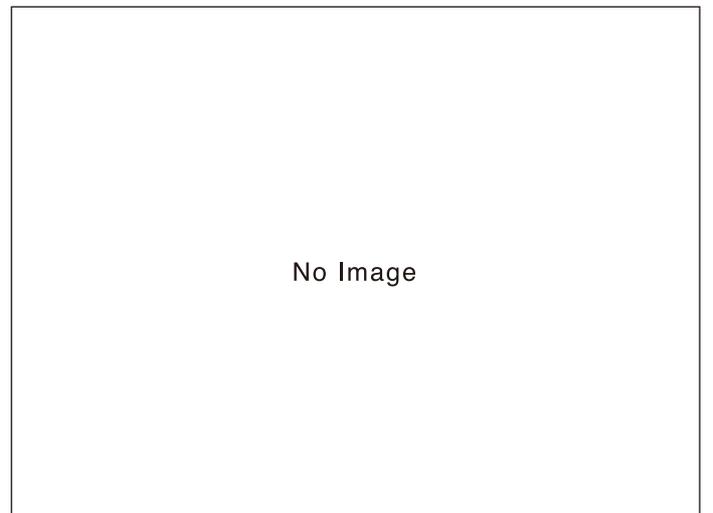


fig.4《死の仮面を被った少女(フリーダ・カーロによる)》2023年 アクリル、カラーコピー・パネル、ノンネオン管、ブリキ製ジョウロ、人工芝 作家蔵

水野清亭《清水陽春》

2021年1月5日～3月14日の名品コレクションIで展示した作品です。2020年度の名古屋市美術館は新型コロナウイルスの影響で長期休館となり、開館したのは年度末のわずか3ヶ月、しかも開館直後には2回目の緊急事態宣言が発令されました。いただいたコメントの中にも時世を感じさせるものが多く見られました。展示から少々時間が経ってしまいましたが、当時を振り返る意味も込めつつ、コメントをご紹介します。

○花のかおりが あたか風が ここまで来そう コロナの中だが 来年こそは！ 清水の舞台で さくらをみたい(Midori)

○雲1つない空と桜の組み合わせなので、とてもポカポカして、良いお花見日和なんだろうなあと思像してみたら、実際に行ってみたくまりました。この状況が落ち着いたら、また前の時のように、何の不安もなく、桜を見上げたいと感じさせられた絵でした。(きい、24歳)

○今寒い季節なので春の京都へ行きたくなります。その頃に新型コロナが治まっているといいですが。(匿名、75歳)

○最近を外に出ることも少なくなりましたので、また桜の咲く頃に近所に散歩に出てみようかなと思った。(レモン、22歳)

○「春爛漫」の風情。春が待ちどおしい気持ちにさせる。その頃には新型コロナも落ち着いて、季節がめぐってくるように、以前の日常が戻りますように。(春うらら、26歳)

○3月になれば、より暖かく桜も咲くのも間近となり、待ち遠しいです。こんなコロナ禍の中、希望を持って内容です！(T.J、53歳)

展示期間が冬季であったことや、《清水陽春》が京都の清水寺と満開の桜を描いていたこともあり、来るべき春を思う内容のコメントが目立ちました。会期中の2月末に緊急事態宣言は解除されましたが、4月末からまん延防止等重点措置、5月から3回目の緊急事態宣言が発令されるなどパンデミックは続き、春の京都を心置きなく堪能するには、もうしばらくの時間が必要でした。

水野清亭(1893-1920)は奥村石亭、福井江亭に日本画を学んだ後、京都市立絵画専門学校に進学、在学中に3年連続で文展に入選するなど若くして頭角を表しましたが、28歳で夭折しました。死因は病死ということ以外は不明ですが、大正9年(1920)はスペイン風邪の世界的流行が起きた年であり、あるいはパンデミックの犠牲になった可能性もあるでしょう。没年の「大正九年度帝国絵画番附」では、石河有鬮や水谷芳年といった年長の画家を抑え、中京画家の中では森村宜稲に次ぐ2番手となっています。もし清亭が夭折せず活躍を続けていたら、中京画壇はまた違う展開を見せていたのかもしれない。(コ)



水野清亭《清水陽春》 大正9年(1920)以前 紙本着彩・軸装 名古屋美術館蔵

新収蔵資料紹介

キャンペーン写真集『この地上にわれわれの国はない』

全日本学生写真連盟公害キャンペーン実行委員会、1970年

1965(昭和40)年、全国の大学の写真サークルの横断的組織である〈全日本学生写真連盟(全日)〉は、その活動の規範であった「共同制作」による表現のマンネリ化を打破すべく、改革を目指しました。

「お互いがひとりの写真家としてあるテーマを共通して持ち、それに対して自由に写真を撮影し、その結果としての写真を一つの大い表現としてまとめ上げて行く」その手法は、「集団撮影行動(集撮)」と呼ばれ、1968(昭和43)年に実践されました。

悲観的なタイトルが冠されたこの小さな写真集は、1970(昭和45)年、集団撮影行動の三冊目の成果として制作されました。1970年と言えば、先の「大阪万博」が開催された年に当たり、敗戦後の復興を邁進してきた日本社会の到達点を内外に印象付けるとともに、一方で「公害」と呼ばれた環境汚染が深刻な社会問題として認識された時期でもあります。

足尾銅山、川崎、東京、北九州、大牟田、室蘭、新居浜・別子銅山、富士、水俣、新潟、鹿島、四日市……。学生たちは、それぞれの地区に分かれ、全国の工業地帯を巡り、ロケハンを行い、地図を作り、そして人々の生活に取材しました。

そうして撮影された118点の写真は、88頁に亘って荒れた粒子で印刷され、完成した写真集は街頭で販売されました。

写真集の見返しには次の様なメッセージが掲載されています。

「この写真集は「見る」ためにつくったものではありません。現実を変えるために、公害をこの地上から完全に放逐するためにつくりました。ですから、見たらすぐ措いて、街頭へ、現地へ、運動の渦中へ参加してください。」

先の二冊(『10・21とはなにか』、『69 11/13-17佐ト訪米阻止斗争』)が、デモに取材した所謂「斗争写真」と呼ばれたのに対して、同写真集は「社会問題」を意識し、現状を調査し、そして撮影者自身ばかりでなく、一般市民をも「社会参加」に巻き込む、正しく運動を目指した「直接行動」の精華であったと言えます。(J.T.)



〈キャンペーン写真集『この地上にわれわれの国はない』表紙〉 1970年

尚、同写真集をはじめ、当時1965年から1980年代にかけての〈全日本学生写真連盟〉の活動とその成果を示す貴重な資料については、〈愛知大学写真研究会〉OBで、〈中部学生写真連盟〉の代表委員長を務められた松本吉生氏からご寄贈をいただきました。記して感謝申し上げます。また、同写真集を含む資料展「抵抗と模索-学生写真運動の展開」を常設展示室2で開催いたします(12/19～2024/3/10、途中一部展示替)。どうぞご期待ください。

ワークショップ

「絵のお医者さんの仕事」

美術をたのしむプログラム「絵のお医者さんの仕事」を、8月19日(土)、20日(日)、22日(火)に小中学生を対象に行いました。このワークショップは、昨年7月から実施している猛獣画廊壁画修復プロジェクトに関連して行ったもので、愛知県立芸術大学の修復チームから成田朱美さんと、相馬静乃さんを講師に迎えました。

まず参加者は、絵の傷みを直すためには絵の状態を調べるのが大切なことや、クリーニングの仕方、そして破れたり、穴が空いたりしたところの直し方について聞きました。また、絵具が失われた箇所に色を入れていく、補彩に使う絵具は、オリジナル画面を傷めず除去できる絵具が使われていることを知りました。これは安全にオリジナルに戻せるように処置するという、作品を大切にしている修復作業の重要な考え方です。

そのあと、展示室にて実際に補彩作業が進められている様子を見学しました。補彩の前には、絵具が失われた部分に充填剤(主に石こう)で埋めて、筆の跡など周囲の絵肌にあわせて整える作業が行われます。こうして整形された白い充填剤の上に、絵具を細い筆で塗っていきます。慎重に進められる細かい作業を目にした子どもたちは、興味津々の様子でした。

その後講堂に戻り、いよいよ「補彩」体験。子どもたちに配布されたトラのぬり絵は、一部が欠けています。最初に直す手順について説明がありました。周囲の色と合わせて色を塗っていく箇所や、周囲を見て線と線をつなぐことで形が見えて色を塗ることができる箇所。一方、トラの目のところは要注意。白く絵具が欠けているように見えても、実は目の光が表現されているところです。絵をよく見て、判別することがとても大切なことも知りました。説明を聞いたのち、絵をよく観察し、色鉛筆を使って複数の色を重ねて周囲の色や形にあわせて塗っていききました。修復が労力のかかる仕事であることや、絵をよく見る面白さを知り、美術や修復への興味を深めてもらえたようです。

猛獣画廊壁画修復プロジェクトでは、12月19日(火)から3月10日(日)まで、修復を終えた壁画3枚を一堂に展示します。また、1月13日(土)には、午後2時より修復完了報告会「未来へつなぐ 猛獣画廊壁画」を開催します。報告会の前には、午後1時より菊里高校音楽科によるミニコンサートも予定しています。詳細は当館のHP、X(旧:ツイッター)にてお知らせします！(I.)



展示室で修復作業を見学



色鉛筆を使って絵の補彩を体験



出来上がりを確認

展覧会現在進行形

開館35周年記念

ガウディとサグラダ・ファミリア展

2023年12月19日(火) - 2024年3月10日(日)

名古屋市美術館で始まる「ガウディとサグラダ・ファミリア展」。第一会場の東京国立近代美術館では大盛況のうちに終わり、この原稿を書いている現在(10月)は第二会場の佐川美術館で開催されています。

その独創的な建築から奇才と呼ばれることも多い建築家、アントニ・ガウディ(1852-1926)。スペイン第二の都市・バルセロナを中心に活躍し、彼が手がけた複数の建築物は、「アントニ・ガウディの作品集」として世界遺産に登録されています。

そんな彼が手がけた建築の中で最も知られているのは「未完の聖堂」サグラダ・ファミリアでしょう。皆さんの中にも、聖堂と作業中のクレーンを一緒にイメージする方は多いのではないのでしょうか。ガウディは、二代目建築家に就任した1883年から、路面電車にはねられて亡くなってしまいう1926年まで、この聖堂の建設に心血を注ぎました。特別展「ガウディとサグラダ・ファミリア展」は、長らく「未完の聖堂」と言われながら、いよいよ完成の時期が視野に収まってきたサグラダ・ファミリア聖堂に焦点を絞り、この聖堂に即してガウディの建築思想と造形原理を読みといていく展覧会です。

ガウディは、図面を引くだけでなく、膨大な数の模型を作ることで聖堂の構想を練り上げました。本展ではガウディ直筆の図面や彼が手がけた模型、人体塑像などを展示し、その独自の制作方法を紹介します。また、ガウディの独創性のルーツをたどることのできる資料や写真など、最新の映像を含め全100点以上の展示物から、ガウディの豊かな世界に迫ります。建築を専門に学んでいる方から、バルセロナを訪れたことのある方、これから行こうと思っている方、バルササポーター、久保健英選手をスペインで応援してみたいと思っている方まで、ぜひお待ちしております！(mm)



サグラダ・ファミリア聖堂、2023年1月撮影

小杉滋樹展

2023年9月15日(金) - 10月14日(土)

ケンジタキギャラリー/東京

近ごろの小杉さんの絵は、愉快であるのと同時に謎めいています。いや、謎めいているのは最近に限ったことではないかもしれません。2021年の名古屋での個展、今年の東京での個展で発表された作品には、なにか古代文明の遺品や、伝統ある民族芸術から受ける印象に近いものを感じました。これはどういうことでしょうか。

たとえば土偶。極度に抽象化されているながら、豊かな装飾をもつ造形は、古今を通じて多くの人々を魅了しています。それが何を表しているのか、何のために使われたのか、いまだに明らかになっていないにもかかわらず、です。そこには、わかりやすさとは別の価値の尺度があります。そして、どうしてそのような姿かたち(デザイン)になったのか、どうしてそのような装飾(パターン)がほどこされたのか、といった表現の理由について説明するのは、さらにむずかしいでしょう。土偶の顔がハート型をしているからといって、縄文人には人や精霊の姿がそのように見えていた、と結論づけるのは単純すぎますし、ウエストが極端にえぐられた造形に、合理的な理由があったのかどうかもわかりません。つまり、その姿かたちをもちたらしめたのが合理的判断なのか、それとも理屈ではない造形感覚なのか、区別すること自体がむずかしいのです。

小杉滋樹 〈untitled〉2022年 油彩・キャンヴァス 130.3×130.3 cm 写真提供:ケンジタキギャラリー ©Shigeki Kosugi

どうしてそうなったのかわからないが、結果おもしろい。(原色や明るい色彩の対比、太い線の使用、パターンの反復などがもたらす)ポップでユーモラスな見た目の小杉さんの絵画から受ける感想ははじめ、そのようなものでした。描画対象の変形(単純化や平面化)や置き換え(図様化や記号化)は、感覚によるものかもしれないし、そうではないかもしれない。ただ、絵具の塗り重ねの順序や、塗り残した余白の塩梅などをみると、勢いやノリに任せただけではない、慣れた手つきやたしかな配慮が感じられます。たとえば、いくつもの作品にみられる絵具の盛り上がりは、毛糸やラグの質感を彷彿させます。そこから、メキシコの先住民族ウイチョルの民衆芸術である毛糸絵(板に毛糸を貼って神話などを描出する)や、アメリカ先住民のテキスタイルとの親近性が浮かびあがってきます。小杉さんの絵画には、二次元画像では伝わらない、実物を見るたのしみがあります。

画題はおおよそ、作者が過去に目にした光景の中から選ばれているようです。その選択についても、理性的判断なのか感覚的判断なのかは見当が付きません。ところが、それが何気ない一瞬だったとしても、小杉さんがアウトプットしたのは、何か象徴や警句を含み、何かを啓示、開示するような、特別なものに見えてしまう。どこか禅の公案にも似た、底知れなさがあるのです。(nori)



トランスボーダー 和歌山とアメリカをめぐる移民と美術

2023年9月30日(木) - 11月30日(木) 和歌山県立近代美術館

和歌山県は、海外への移民が多い「移民県」として知られています。本展は、和歌山県立近代美術館がこれまで積み重ねてきた渡米美術家研究をさらに広げ、アメリカ西海岸で美術を志した作家たちの活動を中心に、和歌山県の移民の歴史と重ねながら紹介するものでした。

今回あらたに注目されたのは、和歌山県出身の上山鳥城男(うえやま ときお)という、ロサンゼルス日系芸術家コミュニティにおける中心人物です。個人的に興味深かったのは、上山は1925年、ポートランドにあるオレゴン大学での壁画制作を控えている時期にメキシコに滞在し、壁画運動で注目されていたディエゴ・リベラとも会っているという事実で、名古屋市美術館の収蔵作家との意外なつながりを知ることができました。日本とアメリカの戦争がはじまると、上山も日系人として例外ではなく強制収容され、コロラド州のアマチ収容所で美術教師として活動します。収容所での人々の生活を記録し

たヘンリー・杉本や宮武東洋の作品と対照的に、上山の作品は、編み物をする女性など収容所の中での穏やかで落ち着いたひとときや、閑散とした静かなバラックの風景を淡々と描いているのが印象的でした。

移民や日系人の美術は、近代日本美術史の語りから漏れてしまいがちですが、近年はこうした「越境」した画家の活動を拾い上げようという動きが進んでいます。ニューヨークなど東海岸だけでなく西海岸に目を向ける視点、あるいはさらに両者間の移動を考慮に入れる視点も、これから重要になってくるでしょう。当館の収集方針の一つ「メキシコ・ルネサンス」の核となる作家である北川民次も、その経歴はニューヨークで学んだ時点から語られますが、シアトルで製茶業を営んでいた兄を頼ってアメリカに赴いたため、渡米直後の一年あまりは西海岸で生活していたことも思い出されました。

ちなみに和歌山県立近代美術館は、名古屋市美術館と同じく黒川紀章建築。エントランスでは、やはり黒川によって手がけられた「中銀カプセルタワービル」のうち1カプセルを見ることができます。当ビルは東京の銀座にありましたが、2022年に老朽化のため解体され、その一部がこうして保存・再生されているのです。レトロフューチャーなカプセルが新たな場所に置かれている様子を見て、黒川が目指した「新陳代謝する建築」に思いを馳せました。(KK)



「イトウェル・カリフォルニア・マカレル」(ロサンゼルス港ターミナル島で製造された缶詰) 1918年以降 ブリキ缶 太地町歴史資料室蔵

「わかりやすさ」の多様性

9月初旬、名古屋市外の中学校から出張授業に来てもらえないかとの相談を受けました。詳細を尋ねたところ、対象は特別支援学級の生徒10名ほど。2学期中に生徒たちを連れて美術館を訪問したいと考えているが、楽しみな反面、はじめての場所に強い不安を感じる生徒もいる。事前学習として美術館がどんなところか、わかりやすく紹介してもらえないか、とのご要望でした。

話を伺いながら頭に浮かんだのは、独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンターのラーニンググループが制作した「Social Story はじめて美術館に行きます。」という冊子です。私はGW明けに関係者からの情報提供で知りましたが、発達障害の人とその家族を主な対象としつつ、美術館をはじめ訪問する人、利用することに不安を感じる人などが、だれでも美術館を楽しみながら過ごすことができるよう、当事者や医療関係の専門家の協力を経て作成されたものです。公式サイトから国立美術館(7館)版のPDFファイルをダウンロードできます。

未知の情報に接する際、「このような案内の仕方だとわかりやすい」と感じる方法は障害のあるなしを問わず人それぞれです。文字だけの説明で十分な人もいれば、写真・イラストなど視覚的なイメージが添えてある方が理解しやすい人もいます。文字の読み書きが不得手な人にとって、対人での会話や音声による情報提供は欠かせません。インバウンド対応での多言語対応や聴覚障害者向けの手話通訳や要約筆記、筆談対応などは少しずつ知られるようになりましたが、来館者の多様性を踏まえたアクセシビリティに対する国内での試みは始まったばかりです。

館によって規模も予算もマンパワーも異なるため、何もかもを完璧に行うことはできませんが、こうした取り組みの趣旨を正しく理解し、出来ることから始める意識は常に持ち続けたいと考えています。今回きっかけをくださった学校の先生に感謝するとともに、当館に見合った内容を組み立て、検討し、活用していこうと思います。(3)



「Social Story はじめて美術館に行きます。」冊子 画像提供 国立アートリサーチセンター *当館図書室でも閲覧できます。